

事業名

高嶺格《いかに考えないか?》整理・保存

団体名

公益財団法人山口市文化振興財団 山口情報芸術センター

概要／課題

高嶺格のパフォーマンス作品《いかに考えないか》（2010年～）の整理・保存を実施しました。



この作品は観客がタッチパネル式キーボードを通じて、スクリーンの向こう側にいるパフォーマーに指示を出し、その指示に応じてパフォーマーが即興的に影絵をつくり出すパフォーマンス作品です。名古屋（あいちトリエンナーレ／2010年）、クロアチア（クイア・ザグレブ／2012年）での発表を経て、山口で2012年に公開しています。この時にパフォーマーを務めるのは、山口市内在住の60歳以上の男女10数名。60歳以上の人々がパフォーマーを務める

というのは、高嶺が本作の構想初期から温めていたプランであり、山口で初めて実現したことになります。



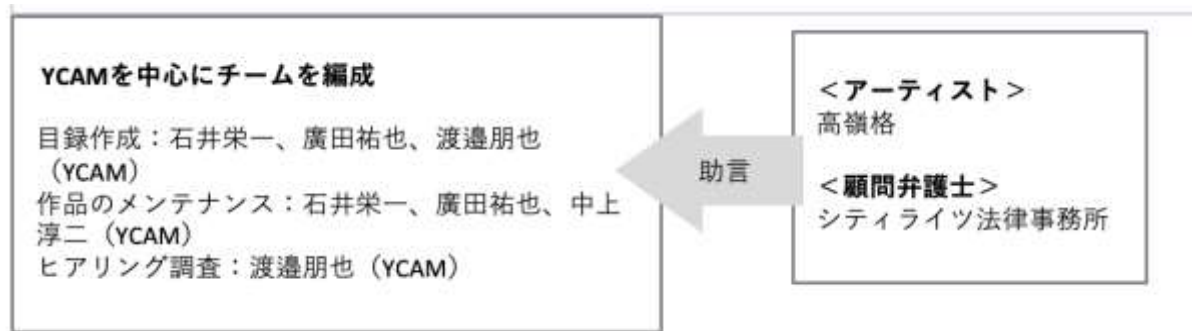
この作品は、技術的には大型のタッチパネルディスプレイや合成音声を使用しており、これらはいずれも当時、普及期であったためいずれも激しく陳腐化し、当時の機材やソフトウェアが稼働しない状況でした。そのため、長期的な運用を見越した機材やシステムの構成にリファクタリング（最適化）する必要がありました。

こうした事情から（コロナ禍もあるとはいえ）、YCAMでの上演を最後に10年以上上演が実現していない状況が生まれているため、本計画では、YCAMが培ってきた作品制作や修復のノウハウを活かしながら、こうした問題点の解決を図りました。



本事業では、本作の山口公演時の記録映像のデジタイズや分類、分析などの調査を実施しながら、作品の使用機材やシステムの見直しや整理整頓、上演のためのテクニカルライダーの整備などを進め、再演しやすい環境づくりのための取り組みを進めました。

体制／手法



成果物

（成果物）

- 作品のメンテナンス
- 過去のパフォーマンスの記録の整理
- 作品設置時のテクニカルライダーの作成

（公開）

2023年に山口の市街地での発表を検討中

（社会・産業に向けての意義／見込まれる社会的利用）

1. 再演可能な状態への復元、維持

陳腐化した機材の置き換えやテクニカルライダーの整備を通じて、いつでも再演が可能な状態を回復しました。ソフトウェアも基本的には堅牢な開発環境、もしくはオープンソース系のライブラリに置き換えて、メンテナンス性をあげています。本作は公開以来数度の巡回をおこなっていたため、今後も同様の巡回をおこなえるだけのオフアーが見込まれます。

2. 作品に関する資料の整備

ソフトウェアのソースコード、インストラクションなど作品に関する資料を整備しました。これにより、今後ふたたび機材のリプレイスが必要になった場合に迅速に対処可能になり、作品の長寿命化に繋がります。

3. 成果の公開

この作品はメディアアート系のインスタレーション作品とパフォーミングアーツ作品の要素を併せ持つ作品であるうえ、鑑賞者も出演者もいずれも参加型である点に特徴があり、そのため一般的なパフォーミングアーツ作品と異なり、劇場ではない空間でも上演が可能、また上演時間が可変で、独特な間口の広さを持っています。作品のインストラクションを準備し、運用しやすくすることで、さまざまな地域で比較的低いコストで上演が可能になると見込んでいます。YCAMでは、山口市の市街地での上演を計画しており、商店街で開催される文化系イベントなどと合わせて賑わいづくり、文化的街づくりに結びつけようとしています。